

【重点目標】(1)合理的配慮に基づいて、児童生徒一人一人の力が可能な限り発揮され小中高訪問寄宿舎一貫した魅力ある指導内容と指導方法の工夫に努め、「一人一人が分かって動ける」授業づくりを実践する。

- (2)児童生徒が安心して学べる学習環境づくりと、防災安全教育の実践を行う。
- (3)教職員相互の信頼と協働体制をもって指導に臨み、明るく意欲にあふれた学校づくりに努める。
- (4)保護者や関係機関との情報交換や連携を密にし、心の通う学校づくりに努める。
- (5)本校の教育についての情報を積極的に発信し、地域と連携した特色有る学校づくりに努める。

1 分掌部の評価

評価基準 A:十分達成できた B:ほぼ達成できた C:どちらかという達成できなかった D:達成できなかった

部	重点目標を達成するための目標	評価項目	評価の観点(具体策)	評価	成果	課題と改善策等
教務部	・児童生徒一人一人が分かって動けるための、授業づくりの実践に向けて、教育環境を整備する。(1)	・安心、安全な学習環境の整備 ・教育効果を意識した係業務の遂行	・教材教具を有効活用できるように、円滑な希望調査や教室の整理ができたか。 ・機材管理を徹底し、トラブル等には迅速に対応することができたか、またマニュアルの見直しができたか。 ・教育効果を意識して各係業務を実践し、検証、改善することができたか。	B	・経費削減、備品の金額変更等で当初予定していた業務日程が滞った。 ・カラープリンターの故障に迅速に対応した。 ・各係ともに、教育効果を念頭に置いて業務遂行することができた。	・事務局、渉外部と連携を図り、消耗品費の有効活用、節約を促していく。 ・学部を越えた利用や利用規定を作成するなど、利用しやすい環境を整える。 ・業務内容によっては、各学部や各校務分掌部との連携が必要である。十分連携を図って業務を遂行する。
	・教員一人一人の授業力向上を図る。(1)(3)	・校内研修の工夫と充実 ・授業研究会の工夫と充実 ・各種研修会の案内等、ニーズに応じた情報の提供	・多くの教員の指導の工夫や手立てになるような校内研修や情報提供ができたか。 ・学習指導部と連携を図り、実践に役立つ授業研究会の計画、実施ができたか。 ・研修会や情報の案内を、教員に分かりやすく提供することができたか。	A	・夏季休業中の研修会は23回開催し、多くの教員が参加できた。 ・学習指導部と連携した授業研究会が実施できた。 ・回覧や掲示板を活用し、情報の提供ができた。	・研修内容の工夫と研修時期の検討を重ね、今後残しておきたい研修を精選していく。 ・例年に比べ参加者が少なかった。校内研究と連動させるなどし、授業研修会の充実を図る。 ・今後も膨大な情報を精選し、よりニーズに応えた提供方法の工夫を図る。
学習指導部	・「一人一人が分かって動ける」授業づくりのため、教員間で学び合う研修の機会を作り、指導力向上を図る。(1)	・校内研究の内容の充実化 ・新学習指導要領に沿った授業実践と授業改善 ・授業研究会の実施	・各係、研究グループのとりまとめ担当者同士の話し合いの場を設け、研究の進捗状況や方向性を確認しながら進めることができたか。 ・主体的・対話的で深い学びのための振り返り観点表の作成と活用を行うことができたか。 ・指導の工夫や手立てについて、情報交換や共有ができ、次の授業へつなげることができたか。	A	・研究グループごとに授業実践及び授業改善に取り組みことができ、指導力の向上を図ることができた。 ・新学習指導要領に基づいた振り返り観点表の作成及び活用ができた。 ・教務部と連携して授業研究会を実施できた。	・研究の方向性について引き続き担当者間で情報を共有していく。 ・新学習指導要領について、更に理解を深められるように研修会等を実施する。 ・夏季休業中の授業研究会は参加者が少なかったため、ねらいや方法を検討する必要がある。
	・児童生徒一人一人の実態を把握し、学習指導に取り組む。(1)	・児童生徒の実態把握のための事例検討会の実施	・児童生徒に対し、個別の指導計画の適切な目標設定及び評価ができたか。	B	・充実した事例検討会を実施でき、個別の指導計画に反映できたが、より多くの教員と情報を共有できると良かった。	・個別の指導計画の適切な目標設定及び評価に結び付けられるよう、自立活動についての情報提供や研修等を行う。
特別活動部	・運動会や体育祭、などく祭において、児童生徒一人一人が日頃の学習の成果を発表する。(1)	・活動内容の設定 ・発表に向けての準備	・一人一人の実態に応じた活動内容を設定できたか。 ・発表に向けて十分な準備期間を設けることができたか。	A	・児童生徒一人一人が活躍できるように活動内容を工夫することができた。 ・早めの計画立案により十分な準備期間を設けることができた。	・次年度は実施時期(運動会・体育祭)や場所(などく祭の一部)の変更が想定される。前年度と同じようにできる部分と見直しが必要な部分を見極めながら準備を進める必要がある。
	・各種行事や部活動において、安全・安心に活動できる計画を遂行する。(2)	・安全に配慮した計画 ・安心感をもって指導できる体制	・児童生徒が安全に活動できるように用具の点検、十分なスペースの確保を行うことができたか。 ・実施するにあたって無理のない活動内容であったか、また、十分な指導体制を確保していたか。	B	・ハートビック各種大会への参加や部活動の実施において、様々なことを想定して危機管理を行うことができた。	・まだ見えてない部分もあるという意識で、前年度からの引き継ぎに加え、一つ一つ確認しながら業務を進めていくようにする。
生徒指導部	・状況を理解し、落ち着いて行動できる防災教育を実施する。(1)(2)	・各種防災訓練の実施 ・児童生徒が落ち着いて行動するための工夫や取組 ・全校生対象の引き渡し訓練の実施	・実践的な避難訓練ができたか。 ・児童生徒や教職員にとって見通しのもてる避難訓練が実施できたか。 ・児童生徒が落ち着いて行動するための工夫ができたか。 ・事前の準備を十分にに行い、円滑な引き渡し訓練ができたか。	B	・避難訓練の実施曜日を昨年度までと変えたり、いろいろな時間帯に避難態勢を取る訓練を実施したりするなど、実践的な訓練が実施できた。 ・全校生対象の引き渡し訓練は、これまで積み重ねた経験とリハールでの反省を生かし、円滑に実施できた。	・児童生徒が落ち着いて行動できるための工夫については、引き続き検討と実践を進めていく。 ・今後の引き渡し訓練の在り方について検討し、次年度以降の計画を作成する。
	・初期いじめを見逃さず、迅速に対応できる指導態勢を構築する。(2)	・いじめレベル0の対応 ・情報共有するためのシステム作り	・いじめレベル0の事案を見逃さず、迅速に対応できたか。 ・いじめの事案を関係者で確実に共有することができたか。	B	・いじめレベル0について、情報共有のシステムを変更し、関係者で速やかに、確実に情報共有できた。	・学部毎にいじめ認知の意識に差が見られるので、いじめの認知、対応に関する意識を学校全体で高めていきたい。 ・いじめレベル0の様式を一部改善し、経過観察が確認できるようにする。

部	重点目標を達成するための目標	評価項目	評価の観点(具体策)	評価	成果	課題と改善策等
健康指導部	・児童生徒の食に関する実態把握と情報共有を適切に行うとともに、実態に応じた望ましい食習慣の形成に努める。(1)(2)	・アレルギー等の適切な把握と情報共有 ・望ましい栄養や食事の取り方について、食事のマナー等についての指導の充実	・児童生徒のアレルギーや食に関する実態把握と情報共有を確実に行うことができたか。 ・食事と健康のつながりについて理解を深めたり、実態に応じた食事のマナーを身に付けたりするための指導を十分に行うことができたか。	A	・アレルギーに関する提出書類の書式を見直し、給食に出る食材だけでなく、そばや生もの等のアレルギーについても詳細な情報の共有ができるようになった。 ・給食の塗り絵コンテストを実施したり、わかりやすい掲示物を工夫したりして、食事マナーや栄養などの指導を充実させることができた。	・アレルギーについては、対象となる児童生徒が年々増加傾向にあるため、確かな情報の収集と共有が必要。今後も書式の見直しや保護者、医療機関との連携を工夫していく必要がある。 ・引き続き、食育の充実を目指して取り組んでいきたい。
	・校内の環境整備に努め、安全で快適な学習環境づくりを行うとともに、児童生徒の環境美化への意識を高める。(1)(2)	・職員清掃および児童生徒の清掃活動の充実 ・校内標示等の修繕、見直し	・校内環境を定期的にチェックし、職員清掃や環境整備、校内標示の修繕等を適切に行うことができたか。 ・児童生徒の清掃活動や校内緑化活動などをとおして環境教育を充実させ、環境美化への意識を高めることができたか。	B	・職員清掃や児童生徒の清掃活動の指導に関しては、必要に応じて実施できた。 ・校内標示については、損傷の激しいものを修繕したり、新しいものに差し替えたりして対応できた。	・ハートビック関係の練習や部活動、保護者懇談などと重なることがあり、特に高部職員が職員清掃に参加できないことが多かった。 ・より安全な校内環境の整備を目指し、校内標示等を引き続き工夫していきたい。
進路指導部	・各学部において、キャリア教育の充実を図るために必要な進路情報や進路指導について啓発を行う。(1)(5)	・夏季休業中や放課後等を活用した研修の実施 ・掲示板や回覧を利用した情報の発信	・キャリア教育を意識できるような研修が実施できたか。 ・進路に関する情報を発信することができたか。	B	・夏季休業中や放課後等を利用して進路に関する研修を実施した。 ・掲示板等を利用し、進路に関する情報を発信することができた。	・進路に関する研修を実施し、キャリア教育についても伝えることができた。希望研修になるので、研修に参加できなかった職員への周知の方法を検討していく。 ・掲示板や回覧だと情報が一方的になりがちであるため、掲示板や回覧等で発信を続けるとともに先生方のニーズを探るような試みを実践し、それに基づいて情報が発信できるようにする。
	・卒業後の生活を見据え、地域の事業所や関係機関等と連携する。(4)(5)	・産業現場等における実習や校内実習、職場見学等の進路関係行事での地域や関係機関との連携 ・個別の進路相談会の実施	・相談会やケース会議等を活用し、関係機関と連携が図れたか。 ・産業現場等における実習や校内外での学習を通して、企業や福祉施設と連携することができたか。	A	・進路相談会や個別のケース会議等では関係機関と連携しながら実施することができた。 ・産業現場等における実習では、既存事業所だけでなく、新規の事業所とも連携し、実習することができた。	・引き続き、関係機関と連絡を取りながら相談会やケース会議を実施する。 ・卒業後の進路先になりうる実習先に開拓を行う。また、生徒、保護者にも卒業後のことをよく考えて実習先を選べるように啓発を行う。
地域支援部	・地域の中でも力を発揮して活動できるよう、温かい受け皿としての地域を目指して、本校児童生徒の理解啓発に努める。(4)(5)	・地域支援事業(地域間交流等)の充実 ・センター的機能の充実	・本校児童生徒を理解してもらう機会と捉え、交流を行うことができたか。 ・障害特性の理解や、支援方法を広めることができたか。	B	・地域間交流は例年とおりの実施で、必要性の認識が希薄になってきている。など祭スタンプラリーは約140名参加で本校生を知ってもらうよい機会になった。 ・支援要請を受けて幼稚園、保育園、小学校、中学校、高等学校への巡回相談を行い、支援方法を広めることができた。	・本校職員に交流の必要性を理解してもらえよう学部会などで実施計画説明の際に伝える。 ・それぞれの子に応じた支援方法だけでなく、学校など全体として支援体制を構築していけるような助言を行うようにしていく。
	・児童生徒が意欲的に生き生きと学習できるよう、地域との協働に努める。(1)(5)	・地域施設や人材の積極的な活用 ・学校支援ボランティアの育成及び協働	・授業で、必要に応じて地域施設を活用したり、ボランティアと協働したりすることができたか。	A	・高部部横縦選挙での大山公民館の活用、大山小学童との交流、文化部での講師依頼など昨年度より協働することができた。	・ボランティアに依頼できる内容を整理し、教員に周知してさらに協働を呼びかける。
渉外部	・PTA行事の円滑な実施による、PTA活動の充実を図る。(4)(5)	・信頼関係の構築 ・子どもの成長につながるPTAの学びの場の提供	・保護者と職員が、協力し合うことができたか。 ・PTA活動を円滑に実施することができたか。 ・PTA・保護者を対象とした研修会を積極的に企画または提供できたか。	A	・保護者と職員が協力し合い、PTA活動を円滑に実施することができた。 ・PTA・保護者を対象とした研修会を、保護者が主体となって計画・実施することができた。	・今後も、会場や時間帯等、保護者からの要望を柔軟に受け入れ、保護者が主体となって計画・実施していきけるよう適切な支援を行っていく。
	・卒業後の充実した生活に向け、人間関係性を高めるために同窓生と親の会の入会を積極的に促す。(4)(5)	・同窓生と親の会の活動についての説明会を行い、在校生保護者に会の活動や意義を伝え、入会者数を増やす。	・同窓生と親の会役員と連携を図り、協力を得ることができたか。 ・説明会を実施したことにより、入会者数を増やすことができたか。	B	・同窓生と親の会役員と連携を図り、協力を得て説明会を実施する予定である。	・同窓生と親の会の説明会を毎年行うようにし、積極的に入会を促すとともに、在校生に対して同窓生と親の会の行事を案内して参加者を集ったり、会報を配付したりするなど、卒後の入会が円滑になるようにしていく。

## 2 各学部の評価

評価基準 A:十分達成できた B:ほぼ達成できた C:どちらかという達成できなかった D:達成できなかった

学部	重点目標を達成するための目標	評価項目	評価の観点(具体策)	評価	成果	課題と改善策等
小学部	・児童一人一人の興味・関心に基づいた授業づくりを行う。(1)	・実態に応じた指導内容と指導方法の見直し ・研究グループごとの授業実践と振り返り ・授業実践記録の蓄積と活用	・一人一人が活躍できる学習内容を設定することができたか。 ・グループごとにテーマを設定し授業を行い、振り返ることができたか。 ・指導案(授業連絡票)や教材を作成し、学部全体で共有することができたか。	B	・実態把握をし、児童の興味関心のある内容に取り入れた授業づくりをすることができた。 ・研究を学年(小グループ)で行ったことで、一人一人が研究に参加することができた。 ・学年での研究にとどまらず、学部全体で共有することができなかった。	・児童の「またやりたい」「もう一回やりたい」等の感想(言葉)を大切に、同じ活動を繰り返し行ったり、活動を少しずつ変化(バージョンアップ)させたりしながら、主体的に活動できるようにする。 ・学部会の際に、学年ごとの研究について発表し、共通理解を図るようにする。また、作成した教材は、小学部として保管し活用できるようにする。
	・一人一人に応じたコミュニケーション手段を見つけ、自分の気持ちや要求を相手に伝える力を高める指導を行う。(1)	・実態に応じたコミュニケーション手段の選択と活用 ・学習活動(内容)の見直し ・保護者や関係機関との連携 ・やりとりを楽しめる環境作り	・実態に応じたコミュニケーション手段を見つけ、活用することができたか。 ・授業ごとに、「選択する活動」「ふりかえりの活動」を設けることができたか。 ・コミュニケーションの場(機会)を増やすことができたか。 ・やりとりをする楽しさを味わい、安定した生活を送ることができたか。	A	・言葉、指差し、サイン(身振り)、絵カードなど、個々の実態に応じたコミュニケーション手段を用いて、自分がやりたい活動や自分が使いたい教材などを選ぶことができた。また、授業の感想を発表することができた。 ・「選択する活動」「感想を発表する活動」を増やすことができ、やりとりをする楽しさを味わったり、みんなの前で発表することで自信をつけることができた。	・児童にとって分かりやすい絵カード(表情カード・気持ちカード)を引き続き作成していく。 ・学校で身に付けたコミュニケーション手段を、家庭や施設でも活用できるようにする。

学部	重点目標を達成するための目標	評価項目	評価の観点(具体策)	評価	成果	課題と改善策等
中 学 部	・校内研究を通し、生徒が見通しをもち、分かって動ける授業を構築する。(1)	・各学年における年間を通した研究の実践 ・研究結果の全ての授業への般化	・生徒が見通しをもち、意欲的に分かって動くことができたか。 ・教師が積極的に研究に関わり、各自の資質を高めることができたか。	A	・グループ編成や活動説明の仕方など、各学年で生徒の実態を考えたながら研究を行った。どの学年においても生徒に良い姿が見られ、生徒が自ら動くよう行動が多く見られた。また、グループで研究することで教師が様々な意見に触れることができ、資質向上に役立った。	・学年などの集団で授業を行ったため、全生徒が「分かって動ける」を実現するためには時間が必要となることもあった。生徒の実態差も大きい。ある程度のスパンの中で焦点を当てていく生徒を決めて丁寧に指導していき、全ての授業において実践を続けていく必要がある。
	・障害や年齢による特性(思春期、反抗期)に伴う教育上の諸課題に適切に対応する。(3)(4)	・チーム(学部、学年)での対応策の検討及び実践 ・保護者、関係機関との連携	・生徒の教育上の諸課題にチームで対応することにより、生徒が安全に学校生活を送ることができたか。 ・必要に応じ、保護者や関係機関と連携をとり、適切な対応をすることができたか。	A	・生徒の教育上の諸課題に対しチームで対応することができた。また、関係機関ともケース会議などで共通理解を図りながら対応することができた。	・生徒の課題に対し、適切に対応できたとしても、解決には至らないケースも多い。生徒を粘り強く支援するための体制作りが引き続き必要である。また障害以外に起因すると思われる行動も多いため、教師は視野を広げ、研鑽に努める必要がある。
高 等 部	・各学習集団の特色を生かしながら、生徒自らが「考え、気付き、挑む」指導のあり方を考え、指導力の向上を目指す。(1)	・コース内での情報の共有(実態や指導方法など) ・「ふりかえり」の徹底及び内容の見直し ・実体に応じた学習形態の工夫(一斉、個別) ・視覚支援教材の工夫	・コース内で生徒の実態や具体的指導内容について話し合いができたか。 ・「ふりかえり」をおして生徒自ら課題に気づき、明確な目標を立て活動に取り組む指導ができたか。 ・個人で考える場面や仲間と相談しながら課題解決につなげる場面指導ができたか。 ・視覚支援教材を工夫し活用することができたか。	B	・コース会を中心に生徒についての情報共有ができた。 ・毎時間ごとの「ふりかえり」が定着してきた。 ・個別やグループなど学習集団を工夫することで主体的、対話的な学びの力を引き出しすることができた。 ・生徒の実体に応じてスタンプやイラストを使うなど視覚支援教材を工夫し、指導に生かすことができた。	・校内研修としての評価も合わせて考えていく。 ・1年目と言うことでまだ生徒自身の伸びしろも見られた。今後も継続した指導を心がけてより主体的な態度を身に付けさせたい。
	・生徒一人一人の自己肯定感を高める支援について共通理解を図り、安心できる環境をつくる。(2)(4)	・生徒の実態(学習面・行動面・対人面など)についての情報共有<学部、コース、学年> ・充実感、満足感、達成感が味わえる内容の工夫 ・生徒同士が互いに良さを認めあえる集団作り	・職員間で生徒の実態について情報交換ができたか。 ・「できた」「わかった」という自信がもて、「やってみよう」と意欲や期待感につなげられる指導ができたか。 ・自己理解および他者理解から、互いの良さを見つけ認め合える関係作りができたか。	B	・コース会を中心に生徒についての情報共有ができた。 ・主体的に頑張ろうとする姿が見られるようになってきた。 ・相手を思いやる場面が徐々に増えてきた。	・一人一人の自己肯定感が高まる指導を心がけているが反面、不登校生徒の対応が喫緊の課題。早期発見や対応を生徒指導部他関係機関と連携していきながら迅速かつ組織的に取り組んでいく。 ・生徒の実体に合わせた無理のない指導(変則的登校含む)を心がける。 ・今年度進路変更のため退学した生徒が出たことは残念であった。今後はそのようなことがないように中学校の段階で適切な進路指導が行えるようセンター的機能を生かした中学校教員への進路支援を行う。
寮 務 部	・個々の特性に応じて、一人一人の力が可能な限り発揮され、舎生が「分かって自ら動ける」取り組みを実践する。(1)	・グループ自立学習を通した研究の実践 ・キャリア教育の充実	・舎生が見通しをもって意欲的に学ぶことができる活動を実施できたか。 ・一人一人の社会的自立に向けて、必要な能力や態度を育てることができたか。	B	・実態を考慮してグループ別に学習することで、その時間の課題に積極的に取り組もうという子ども達の姿勢が見られた。また、舎生が活動に見通しをもってよう工夫することで、落ち着いた取り組み姿も見られた。	・今年度から学習指導部と連携を図り、校内研究への取り組みを開始した。 ・振り返りシートを活用し、内容や目標が明確になった。また、全職員がシートを回覧することで、次の活動に反省点を活かすことができるようになった。 ・子ども達が学んだことを次の活動に活かせるように、グループ自立学習、宿泊学習を実施した後に、前回の振り返りをしたり毎日の生活の中で活用したりしていきたいようにする。
	・寄宿舎教員の資質向上を図り、個に応じて生活能力が高められるよう、学校・家庭・関係機関と連携して支援に努める。(3)(4)	・研修の充実(実習時の巡回同行を含む) ・報告・連絡・相談の徹底	・生活支援、健康、関係機関に関する研修を定期的に設け、寄宿舎教員の資質向上に努めることができたか。 ・寄宿舎と保護者、学校、施設間で児童生徒の課題を共有し、関係者間の信頼と協働体制づくりに努めることができたか。	B	・進路指導部や学級担任の協力を得て、産業界等における実習時の寄宿舎教員の巡回同行に積極的に参加できた。看護師や進路指導部長を講師に招いて研修を行い、資質向上に努めることができた。 ・医療機関、教育支援センター、子ども幸福課等と舎生の課題を共有し、協働体制づくりをすることができた。	・来年度以降も研修の機会を確保する。予定している研修会だけでなく、職員から要望があれば、それに関する研修も実施する。 ・舎生の実態について共通理解を図るために、今後も寄宿舎内での打ち合わせの時間を十分に確保していく。また、学校と寄宿舎の連携を図るため、学級担任と寄宿舎担当の情報共有を大切にしていきたい。
訪 問 教 育 学 級	・全ての児童生徒が達成感を味わい、楽しみの中から学びに向かう意欲を育てる授業作りを行う。(1)	・個別に対応した教材・教具の準備 ・感情表現の適切な読み取りと共感力の向上 ・授業の振り返りと教員間の評価の共有	・十分な教材等の準備に基づき授業作りが行えたか。 ・児童生徒の主体的な活動やそれにつながる感情の動きを読み取ることができたか。 ・実施後の評価について話し合う機会をもち、共通の認識のもと評価が行えたか。	B	・普衆の集団学習において、授業内容の充実が図られ、全ての児童生徒が体験を通して楽しめる活動を年間を通じて実践することができた。 ・授業の様子をビデオに撮り、振り返りを行うことで、児童生徒の反応の受け止めについて、共通理解を図る機会を多くもつことができた。	・制作活動、感覚遊びなども同様に見直しを図り、全ての授業で一人一人が受容した感情を表現できる場と手段の設定を行う。 ・集団学習以外でも、個々の授業について、成果や課題を話し合える場を設け、それぞれが必要な支援を適切に準備できる環境を整える。
	・新たな授業実践に積極的に取り組み、協働体制を整え、訪問教育学級全体の授業内容の充実と授業力向上を図る。(3)	・研修会の参加と定期的な情報共有 ・分担と協働による円滑な授業準備	・定期的な情報共有の機会を設けることができたか。 ・偏りなく分担を行い、協働性を密にして授業準備に取り組めたか。	B	・受講した研修の資料をもとに、学部会内で報告会を行い、日々の授業実践につなげる機会をもつことができた。 ・学級ごとに行っていた季節の制作のアイデアを持ち寄ることで、学習内容の偏りを軽減することができた。	・今後も定期的な機会を設け、全体の授業力向上につなげていく。 ・アイデアを持ち寄るための情報交換の場を定期的に設け、円滑な授業準備と授業内容の充実につなげる。
重 複 障 害 学 級	・児童生徒にとっての「分かる」について検討し、意欲的に取り組める授業作りを行う。(1)	・児童生徒の実態把握に基づく授業実践 ・授業の振り返りと指導内容の検討	・的確な実態把握に基づいた授業の実施や教材の工夫を行うことができたか。 ・児童生徒の「分かる」またはそれにつながる反応や表出を引き出すことができたか。	B	・丁寧に実態把握を行うとともに、体調や天候を考慮して授業内容を見直したり、児童生徒に合わせた教材を工夫し、実践することができた。 ・教材等への注視や笑顔、「もつとやりたい」という感想など、興味関心や意欲を引き出すことができた。	・丁寧な実態把握を行って授業や教材の工夫を行っても予想した反応を引き出すことが難しいことも多い。より丁寧な実態把握と授業実践を重ねる。 ・反応や表出が難しい児童生徒の読み取りについて、複数の教員で児童生徒の反応等の共有や指導内容の検討を行う。
	・危機・危険意識の向上を図るとともに、安全な学習環境作りを努める。(2)	・事例検討会や勉強会での情報共有 ・教員間での安全確認	・事例検討会や勉強会を実施し、安全に配慮し学習指導に役立てることができたか。 ・教員間で適宜声を掛け合うなど、安全な学習環境作りに取り組むことができたか。	B	・移乗や危機指導の確認、勉強会を通して安全面への配慮を促すことで、危機感を持ち学習指導に取り組む様子が見られた。 ・周囲の様子や姿勢など、教員間で積極的に声を掛けたり対応策を提案することが出来た。	・教員が自身の姿勢や体の動きを意識することが、児童生徒にとって安全な移乗につながるための意識向上を促す。また、全体的に摂食への意識向上のための取り組みを行う。 ・活動前に安全上の不安の有無、万が一の対応などを検討して学習環境作りを行う必要がある。